
我々共が夢の跡

ハチエット

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我々共が夢の跡

【NZコード】

NZ879N

【作者名】

ハチエット

【あらすじ】

辺境の貧しき国、ヘイムズを踏みつけ空を貫く巨大な影。

誰とはなしに人々はその影を魔王と呼んだ。

魔王来訪から三年後、ある者はいざこかへ消えたヘイムズの民の残した財宝を狙い、ある者は栄光を求め、ある者は失った者を再び手に入れるため、ある者は力を求め、ある者は正義のため、ある者は何者かに導かれ、再びその地に人が集う。

しかしその地は既に人類のモノではなかった。

泥の雨に打たれ、吹き荒ぶ風に吹かれ、険しい山々を超え、魔に

飲み込まれ、一つまた一つと命の代償は払われる。
それでも人々の歩みは止まらない。

魔王来訪の地、魔都ヘイムズを巡るダークファンタジー。

人の子よ何故。

「おい、なにか言つたか?」

至近距離にも関わらず、耳を劈くような雨音に負けじと大声でガラクシーが叫んだ。

「僕はなにも。だけど学者先生、じじじや誰も何も言つていなくて人の声が聞こえるなんてしそつちゅうだ。で、そういう時は隠れてやり過ごすのが一番なんだ」

「休憩はさつきしたばかりだろつ!」

「僕の指示に従え先生。少し戻れば教会があつたな、そこまで戻ろう」

「五歩進むたびに四歩戻らなきやいかんのか? これじゃいつまで経つても目的地に付かんぞ」

「今日は特別だ。さつきから何かが妙に、畜生め、騒がしい。まるで蜂の巣を突いたみたいだ」

言葉で説明出来ない、暗澹たる不安がブツチャ一の胸中に去来る。具体的に、どう危険なのか、なにがおかしいのか、口に出せないのがもどかしい。

それはたとえば、数メートル先の景色の色が、わずかに赤みがかつてているように見えるとか、雨音が僅かに耳に重く残るとか、足元を跳ねる泥がいつもよりも高く飛んでいる気がするだとか、そういった些細な他愛のない違和感の集合体だった。一つなら良いが、それがいくつもあると、予想もつかない良くないことが起こる気がする。

笑つてしまつほど漠然とした不安感だが、それを無視するわけにはいかなかつた。

「先生、今日はダメだ」

「ダメ？ くそ！ 私は君に、確かに報酬を払ったよな？ きつかり、銀貨三枚！」

「僕があなたに頼まれたのは、貴方を安全に『裏ドアの皆』に案内することだ。そして今強行すると、永遠に辿り着かない可能性がある」

ガラクシーは不満げに唸り、やがて渋々と言った調子で言つ。

「倍の報酬を払つてもいいぞ」

「ダメなものはダメだ。僕を信用してほしい。報酬は最初に交わした契約のもので十分だ」

一度頑なに口に出してみると、不安感はますます確信めいてきた。逃げなければならぬ、それも、可能な限り早く。

「急げ先生。引き返すぞ」

「まったく、ままならんな」

ガラクシーは不満を口にしながらも、結局はブッチャードに従つた。

来た道を引き返し、僅か五分の出来事だった。一寸先の視界を覆わんばかりの雨に紛れ、それはやつてきた。

「止まれ、誰だ」

前方に人影。ブッチャードは即座に手斧を抜き、後に続くガラクシードを手で制した。

輪郭以上のが見えないのは雨の所為かと思ったが、そうではなかつた。それは確かに人影だった。

人影以上のものではなかつた。
縁だ。

雨の中に入間の形をした輪郭を認識出来る。それは決して、現実の眼で見えているものではなかつた。縁なのだ。そこに人間の形をしたものがある、ということだけはハッキリと判るのだが、音もなければ、匂いもない。形すら、実際には見えない。

「畜生め。そんな馬鹿な」

ふと意識を向ければ、その影は既に無数にあつた。囲まれている

……というわけではない。影たちは各自の進むべき方向へと歩んでいて、こちらのことは全く意に介していない。

「ブッチャー？」これは？

ガラクシーが不安そうな声を上げる。

「人影が見える……存在が希薄だ……早々に私もいかれたか」

「フランシュバックだ！ 先生走るぞ！」

「ああ？」

「僕の背中だけを見て走れ！ 来い！」

言うや否やブッチャーは手斧を投げ捨て、雨に濡れた外套も脱ぎ捨て、泥を蹴つて走りだした。

「ブッチャー！ どういうことだ！ これはなんだ！」

「説明してる暇はない！ 走らなきゃお陀仏つてことだ！ 外套は捨てろ！」

「どこまで！？」

「建物……教会まで！ もう黙るぞ走れええええええええええええええ！」

影はますます増えていった。大きさはバラバラで、大人のような人影も、子供のような人影もある。並び立つように歩くもの、手を繋いでいるように見えるもの……いや、実際に、ような、ではなく、大人の影と子供の影なのだろう、とブッチャーは思った。

（ヘイムズの記憶）

ヘイムズが死んだ後……ヘイムズが魔都と呼ばれるようになつた後に頻発する現象だ。

一ヶ月に一度、ヘイムズはまさに思い出したかのように過去の幻影を呼び覚ます。（一ヶ月といつても、大体一ヶ月程度に、という意味でだが）誰も直接は口にしないが、あの影は明らかに消えた筈のヘイムズの民の幻影だった。

（だがなぜそう思うのだろう）

もちろん、明確に、あの影が消えたヘイムズの民の幻影だと誰かに教わったわけではない。だが、直接あの幻影を目にしたもののが多

くは、不思議とそれを悟った。

それどころか、幻影の中にいると、もつと多くのものが見えるような気さえする。そしてそれを不幸にも実行に移した人間は、例外なく狂い軋み倒れていった。

雨が途端に重くなり、足が空回り始めた。全速力で走っているにも関わらず、汚泥に腰まで浸っているかのような感覚だ。

悪夢に追われているかのようだ。実際、このもどかしさも、現実味のなさもそれに近い。

まっすぐに走っているのか、それすらも疑わしい。

（畜生め。なぜ今起こる？ 以前はつい一週間前だぞ？ 教会はどこだ？ 建物に入らなければ、間に合つのか？ 先生！ 先生さんは付いてきてるのか？）

「ブッチャヤー……待て、待つてくれ……足が」と、後方から細い声。

「おかしいんだ……足がなくなっている気がする……」

ガラクシーが走るのを止め、座り込んだ。

「人が沢山いる。祭りだとみんな言つている……音楽が聴こえる……聞いたことがあるな……ああ、そうだ、実は私は、以前……若いころだが、ここに来たことがあるんだ。祭りに参加したんだ。この曲は、ヘイムズの民が好んで、伝統的にだが……弾いたり聴いたりする曲だ。祭事の時はよく流れてる……」

ガラクシーの声は、ほとんどうわごとだった。眼は中空を漂つていて、走ることをすっかり忘れている。

「立て先生！ 置いていくぞ！」

「そうだ、思えば妻と会つたのは、その祭りだつた。馴れ初めなんてスッカリ忘れていた……十年に一度の大きなお祭りだつたらしく、結局、なにを祝つてているのか、誰も知らなかつたが、街中に酒が入つていて……子供もな、その日だけは、飲んでいいらしい」

ブッチャヤーはそれ以上耳を貸さなかつた。先生すまない、とだけ小さく呟き、正面に向き直る。出会つた三日程度の間柄だつたが、

それでも彼のことは気に入っていた。好んで見捨てたいといつわけではないし、もっと致命的な場面じゃなければ、多少なら命の危険だつておかしてもよかつた。

だからと言つて、無駄死には「めんだつた。

（貴方は助からないだろう。あとほんの少し状況がマシだつたら……きっとあなたをひきずつて歩いていた）

今はもう先に進むしかなかつた。既に、ブッチャーの耳にも喧騒が僅かに聞こえ始めている。

（あとほんの少しマシな状況？　なにを言い訳しているんだ、僕は。誰も聞いちゃいないってのに！）

高慢なプライドがチクチクと痛む。それでもきっと助けていた、きっと助けていた、と心の中で何度も呟くが、その内は自分自身では覗き込めなかつた。

（行かないと、誰にもどうにも出来なかつた。誰にも……）

その時、雨間にそれは見えた。十字架だ。こちらを見張るかのように様子で、高々と、堂々たる姿で。

（教会……こんなに近づいてたのか……）

距離にして、五十メートルはないだろう。が、今や身体に圧し掛かるものは重い雨だけではなかつた。後方ではガラクシーが突つ伏している。

（出来るだらうか。彼を拾つて、教会まで……歩むことが、僕に）
無理だ。と残酷な声がする。

実際に、ブッチャーの身体と精神は限界だつた。喧騒と、ついには音楽までもがその耳に聞こえてきた。もう戻れない。いや、あと五十メートル歩くのがえ怪しいんだ。と、ブッチャーは声に出したかった。

（いつたいそれを誰に聞かせたいんだ、僕は）
済んで、口に出すのだけは堪えた。が、それは身体の中で暴発した。もう戻れない。五十メートルをたつた一人で歩くのだつて難しい。助けることなど出来はしない。

膝を付き、喘ぐ。息が苦しい。喉を裂けばきっと呼吸が楽になる。
と忠告にも似た声が聞こえた気がして、実際に喉に手を掛けるが、
ぎりぎりで抗つた。

誰も助けることなど出来はしない。誰も、誰かを、助けることなど。

人には限界がある。肉体の限界もそつだが、きっと良心の限界だ
らう。

(見てきたはずだ。ブッチャー。お前が、それを必要とした時に、
誰もそれを与えなかつたように)

その、自分自身の説得にも似た考えが頭を過つた時、ようやくブ
ッチャーの頭の霧が晴れた。歯を食いしばり、再び立ち上がる。

「僕はブッチャーじゃないぞ馬鹿めが！」

そう、心の中に語りかけてくる魔王に向かつて叫び、ガラクシー
の元へと走った。

魔都ヘイムズ（後書き）

始めまして。ファンタジー初挑戦になります。
どしどし意見、質問、改善点等、なんでもお待ちしております。

魔都ヘイムズ2

ブッチャヤーはガラクシーを抱えたまま、教会を蹴飛ばした。恐れていたよりもあっさりと扉は開き、二人はその場に倒れこんだ。外の喧騒が嘘のように、教会内部は静かだった。

(教会か……)

ブッチャヤーは信仰とは縁のない人間だった。いや、むしろ、貧しい少年時代を過ごしてきた者にはありがちなことではあるが……ある種の敵意を持っていた。

神や伝承が憎いわけではない。信者や、司祭が憎いわけではない。それが生む衝突が憎いのだ。

啓示をお題目に武力を振るう宗教家も憎いし、その事に過剰に反応し、暴力を返す無神論もまた憎い。

(憎しみあわなければいいんだ、憎しみあわなければ……)この地を見ろ、外の人たち……僕たちは欲望のまま傷つけあつてているが、まだ健全だ……)

疲労の所為か、思考がまとまらない。雨に打たれ過ぎた所為で寒気もある。打ち捨てられた教会だが、暖炉くらいはあるだろう、とガラクシーを引きずつたまま奥へと進む。

「ブッチャヤー……？」ああ……助かったのか……ありがとう、戻つてきてくれて」

と、驚くほど明朗な声。ガラクシーが目を覚ましていた。

「先生、大丈夫なのか？」

「君のお蔭でね。助かったよ、いい腕だ。君を雇ったのは正解だつた。座り込んでいる時は頭の中に霧が掛かっていたが、終わつてみればハツキリと思い出せる。酷い体験だつた、と、君が戻つてこなければ、そう感じることさえなかつたのだろうな」

「僕自身は……向いてないとはするもんじゃないなと思っていた所だよ」

実際、小遣い稼ぎのつもりで雇われたものの、誰かを守りながらこの地を歩むことが、ここまで辛いとは思わなかつた。

「ここには安全なのか？ 教会？」

「別に教会だからってわけじゃない。理由は知らないが、あれは野内では起こらないんだ。ここにいる限りは、あれからは身を守れる。あれからはな」

「他になにがあるのか？」

「なんでもだ。とにかく、今田のこととで懲りたなら、以後は……少なくとも、契約通り、皆に着くまでは僕の指示は絶対だ。僕が走れと言つたら走つて、しゃがめと言つたらしゃがむんだ。場合によつちや、歌えと言い出すかもしかんが、その時は疑問を口に出す前に歌つてもらう」

「私は音痴だぞ」

ガラクシーはやや的違いな返事をしたが、それでも首肯した。

「君の指示には従う。だが、質問をするくらいはいいだろ？ あれは一体なんなんだ？ 人の姿が……おそらくはヘイムズの民が見えたが……」

「僕らはあれをフラッシュバックと呼んでいる。あれは……そうだな、貴方の言うとおり、ヘイムズの民なんだろうな。なぜ起こるのか、実際の正体はなんなのか、誰だつて知りはしないが、僕らの認識では、あれが起きるのは一か月に一度の筈だつた」

「だつた？」

「前回は一週間前だ。今回のフラッシュバックは、全く突発だ。予想すらしていなかつた。畜生め。今回のこと我が例外中の例外ならいいんだが」

ブッチャードを含め、この地に訪れている再開拓者はフラッシュバックの発生時期は野外の探索を避けることにしている。発生時期が安定していた分には、ヘイムズの災厄の中では回避しやすい部類ですらあつたが、それを裏切られた。

これまでますます外を歩きづらくなる。

「……明日には収まる。首尾よく行けば、雨も上がるだろうな。出发はその後だ。火を焚いて寝てしまおう。砦にも明日中に着く」

「外ではまだあれが起こっているのか？」

「ああ、そうだ」

「なあブツチャヤー、あれの中に居た時に……何かが見えた気がするんだ。凄く大切な何かが……」

「そう言つて誰も戻つてこなかつたぜ。僕は貴方がここに何を探しに来たのかは知らないが、貴方の探し物のことを、この地は知つている。それは忘れるなよ」

幸い、教会内部は燃料には事欠かなかつた。古びた本もあれば、ほとんどの椅子や机が木製のもので、火をつけるのも、それを保つのも容易い。

「そういえば、ここで本名を名乗つてはいけないという理由が判つたような気がしたよ」

炎に影を揺らしながらガラクシーが言つ。早めに眠つたほうが多い、と忠告はしたが、寝付けないらしく、とつとつと語り始める。「ずっと私をガラクシーと呼ぶ声が聞こえていた。ああ、懐かしい声だつた。たぶん、母だ。ガラクシーこっちへおいで、と。誘惑に耐えかねてふらふらと歩きかけたが、思えば母が私をガラクシーなんて呼ぶわけがないんだよなあ。ここに着てから、適当に名乗つているだけの名前なのに」

ガラクシーの言つとおり、再開拓者は決してヘイムズの地では本名を名乗らないようにしている。この地の支配者が……魔王と呼ばれている得体のしれない何者かが、その本名を利用するからだ。

「僕もあの中にいたとき、君を見捨てるように言い聞かせていた自問が、僕をブツチャヤーと呼んでいた。名前を知られていれば、僕も貴方も廃人になつていたな」

（見てきたはずだ。ブツチャヤー。お前が、それを必要とした時に、

誰もそれを与えなかつたように）

その、自問の声がありありと蘇る。今更ながら、何者かに心中に進入されていた、という事実を思つとゾッとした。

「この地、ヘイムズの今の支配者の影響力は、文字通りヘイムズまで、外の世界にまでは手が伸びないと云ふとか。つまり、万能ではない」

（今までにな

ブッチャヤーはこゝそりとそつ思つ。一つの国を一夜にして消滅させるほどの力の持ち主が、明田にも沈黙を守る保障はない。「明日には晴れるかな？　こゝに着てからずつと雨だつたり曇りだつたり霧だつたり、まだ私は、この地の支配者を見ていらないんだ」「焦らなくても、晴れれば嫌といつほど見れる。なにしろあれと来たら、冗談抜きで山よりも大きい。で、また一つ忠告だが、あまり魔王を見すぎるとなよ」

天気さえよければ、ヘイムズの王城に屹立する、天を貫かんばかりの巨大な魔王の影がここではいつでも見ることが出来る。ブッチャヤー自身、初めて目にした時にはその姿に膝を折り、柄にも無く神の存在について考える羽目になつたが、それも一ヶ月もすれば見慣れた風景となつた。

魔王は、来訪後三年、寝返りの一つすらせずに沈黙を保つてゐる。その姿は影が見えるばかりで、質感すら定かではない。そもそも生き物なのか、それとも別の何かなのか、それすら知るものはいない。そして、魔王の膝元に辿り着いたものも、またいない。

「魔王は、私達の存在に気がついているのだろうか？」

「さあ。気づいていないか、気にしないでいてくれることを祈るのみだ」

「ブッチャヤー、私は……」

ガラクシーが僅かに息を呑み、それから言ひづらやうにだが声を絞り出した。

「あそこに行きたいんだ。ヘイムズが王城、魔王の足元に」「辿り着いたものなどいない」

ガラクシーの言葉はブツチャ一にとつて意外なものではなかつた。誰も彼もが、そうだ。栄光も金も、奇跡も、全てはあの場所に集結している。

「いないのか？ 本当に？ 誰一人？」

「王城は城壁に囲まれていて、その外は山だ。山間にはフラッシュバックから身を守る為の建物なんてないし、城壁の門は閉ざされている。門に辿り着くための唯一のルートには……橋が……」

「橋？」

「橋だ。やたらでかい、石造りの立派な。あの場所はずつと深い霧に覆われていて、一寸先も見えないような有様でな。以前、熟練の再開拓者が十人がかりで橋を渡ると砦を出て行つた」

その中には見知った顔もいくつかあつた。ヘイムズに着き、右も左も判らぬブツチャ一に生きる為の術を教えてくれた、恩師とも呼べる者もいた。

「帰つてきたのは三人。一人は砦で目を覚まし、すぐさま呪詛を吐きながら近くにいた人間に切りかかつた。一人はなにも言わずに首を吊つた。最後の一人は……」

「どうなつた？」

「いない。どこかへ消えた。僕はそいつを探しているのさ」

魔都ヘイムズ2（後書き）

一週間に一度か、二度程度の更新頻度になりそうです。
長いお話になりそうですが、気の向いた方はお付き合いを。

しばらくは静寂が続いた。ガラクシーは眠つたのか、と思つた矢先に、再びガラクシーが口を開く。

「私はずっと以前、ここに来たことがあるんだ」

教会の静謐な雰囲気がそうさせているのか、どこか告白めいた口調だった。

「……フラッシュバックの中でもそう言っていた。聞かないほうがいいのかと思つていたが」

「いいんだ。言わせてくれ。いや、聞いてくれ。当時の私は貧乏学生で、貧乏なのは今でもそう変わらないが、とにかく、様々な場所に旅行に行く気力があった」

（旅行に行くだけの金もあつたのを）

僻みじみた考えがふつと浮かんだ。が、すぐに自分自身に対する嫌悪感も浮かんでくる。

「隣国のナの国が、ヘイムズへの侵略準備を推し進めていた時勢だつたな。私も半分はナ人だが……だがまあ周縁部はのんきなものだつた。いや、生活は苦しかったんだろうが、努めてのんきに過ごしていたな。気候は寒いが、人々は暖かい、そんな国だった」

不思議と、この地にいると昔話を聞く機会が多いな、とブツチャ一は考える。郷愁を駆り立てる何かがあるのだろう。ブツチャ一自身、思い出したくもない過去も、美しいままにしておきたい思い出も、度々頭を過つた。

「そこで祭りに参加した。よそ者の、それも半分はナ人である私も、彼らは容易に受け入れてくれた。妻ともそこで出会つた」

「奥さんが居るのか？」

「居たんだ」

悔恨の声。

「娘も居た。幸せな家庭というものを、私なりに築いていた」

「なぜ……いや、すまない。だが聞いていいか?」

一般的な幸せな家庭というものには興味があつた。

「病気と、病気から娘を守ることが出来なかつたという悔恨からだ。妻は自殺した。そして今、私も、きっと時間をかけた死の道を歩いている。だが、ブッチャー、私は……笑わないで聞いてくれ、ここにあると聞いてのこにこやつてきたんだ」

「なにがだ?」

「失つたものを取り戻す方法が」

「死んだ人間が生き返るとでも?」

「ああ、そうだ。いや、きっと私も本音では信じていない。本当は、それが無いことを確認しようとしているのかもしれない。だがもし……もし、それがあるのなら」

ブッチャーは、それを否定できなかつた。彼自身、ヘイムズの王城に何が待つてゐるかなど、想像すらできない。だが、口に出して否定はできないまでも、心の内では違つた。

(そんなものはないよ、ガラクシー)

「王城に行くには、その、危険な橋を渡らないといけないといふのは確かなんだな?」

「それは確かだ」

「では、橋まででもいい。ブッチャー、私をそこまで案内してくれ。もちろん、報酬は払う

「貴方の自殺を手伝うつもりはないぞガラクシー」

ブッチャーは厳しく言い放つた。

「じつくり、時間をかけて進むんだ。そんなものがあるにせよ……僕は、すまないが、ないと思つてゐる。だが、焦ることはない。それでも、なにかの事情で時間がないのか?」

「いや、私は、残りの人生を捧げることにしている」

ガラクシーは、迷いなくそう言つた。捧げる、とはゾッとする響きだつた。

「ではなおさらだ。橋を渡つて、帰つてきて、消えた男の話をしただろ？ 僕がそいつを探しているとも？ それに、どこかの馬鹿が橋の攻略の為に、また人を集めている。もつと言つてしまえば、誰もが、貴方が目指す場所に行こうとは田論んでいる。貴方が一人でやる必要はないということだ」

勇気づけるつもりで言つたわけでもないが、その言葉はガラクシ一が聞きたかった言葉らしい。そうか、と微笑み、それからようやく横になった。

「少し眠るよ、見張りの交代の時間になつたら起こしてくれ」

「ああ、いい夢を」

（再会の夢を）

ブツチャードは朝が来るまで起こすつもりはなかつた。瘦せた学者は明らかに疲れていて、今にも風に攢われそうな様子だつた。彼には休憩が必要で、僕は慣れている。そう判断した。

そして長く寒い夜を独りで過ごしていると、例外なく、故郷もなく彷徨い続けた自らの半生がぼんやりと、思い出という形で蘇つてくるのだ。今まで、全くの、例外がなく。

魔都ヘイムズ3（後書き）

ファンタジー的手続き、世界観の説明を続行中。
ファンタジーって難しいですねー。

ホームカミング

ナイツは幼い自分と、兄弟姉妹達を追っていた。

実態のない幻影の喧騒に囲まれ、過去のヘイムズをさ迷い歩き、眠気にも似た意識の朦朧があり、唯一、実態のあるように見える少年少女の姿を確かに見て、縋るようにそれを追っていた。

紛れもなく、幼い自分だった。もはや、顔も思い出せないが、そばに居た少年少女達は、孤児院の家族だらう。

「待て！ 待つてくれ！」

十年ぶりの帰郷。自分自身、どのような意図があつたのか判らない。郷愁と使命感のない交ぜになつた、自分自身では処理しきれない感情があり、それに支配されるまま、ナイツは魔都と呼ばれるようになつた故郷に帰ってきた。

家族たちと再会出来るなど、願つたことはあつても、思つたことはなかつた。

幼き自分と、兄弟姉妹達はナイツの手をするりと抜け、微笑みを浮かべ、それから走り去つた。時折、こちらを見て、おいでと言いたげな眼を向ける。

（きっと俺は狂つてしまつたんだ）

そう思いながらも、追わずにはいられなかつた。待て、と叫ぶ度に、兄弟姉妹達は一々立ち止まり、こちらに手を差し伸べた。そしてまたするりと居なくなるのだ。

とりわけ、幼い自分だった。こちらを試すかのように、嘲笑うかのように、一番近くまで来て、一番巧みにこちらの手を逃れた。実際に声が聞こえたわけではないが、（うすのろ、大人のバカめ。お前なんかに捕まるわけないだろ、この俺がさ？）そう、心の内に聞こえた気がした。

（そもそも、バカめ。俺がさ、特別な、この俺が、選ばれた、この俺が、大人なんかにさ、特別なこの俺を怖がつておる前らなん

かにさ、どうにか出来るわけがないんだよ）

心の内から聞こえる生意気そうな声。

（大人になって、あつと言ふ間に忘れちまつたのか？ 人間の悪たる部分を許容できないって思いを。誰だつてそう思つ純粹な日々をさ）

搔き篋られるかのような頭痛に、ナイツは膝を折る。必死で足を動かそうとするが、無駄だつた。もう一步も歩けない。

見上げれば、見下ろす幼い自分。

「ウイリアム……」

ナイツはついにその名を叫んだ。幼い自分の名を。

ナイツは凍えるような寒さと、皮膚にチクチクと刺さる藁のいたずらで目を覚ましたが、それは決して不快な感覚ではなかつた。

故郷に戻ってきたのだ。母が、母だと個人的に思つていたあの優しい人や、父だと個人的に思つていた厳しい人が、毎夜しなびた野菜のスープと一切れのパンを用意してくれる、あのHomeに。

孤児院の近くには、金持ちの……名前は思い出せない。小柄で肥えた、立派な髪を蓄えた氣のいいおじさんと、その婦人の豪邸があつた。今にして思えば、彼らは貴族だったのだろう。だが優しかつた。少なくとも、ナイツや、孤児院の仲間にはそうだつた。

貴族の屋敷には馬小屋があり、よくそこで昼寝をしていた。恥ずかしながら孤児院から家出をした時も、そこに隠れていた。

今はきっとあの馬小屋にいるのだ。

苦しくも楽しい少年時代の情景が洪水のように頭を流れ、ナイツはしばし寝起きの気怠さを身にまとつたまま、まどろんでいた。寝返りを打つと、また藁が身体中をなでる、それ以上の大事なことが……例えあつたにせよ、十分や十五分程度は忘れてても罪にならないような気がしていた。

「起きたか。運の良い奴か、悪い奴か、それはこれからハッキリするだろうが、おはよう。僕が何を言つてゐるか判るか？」

「え？」

耳慣れぬ声にナイツは身構える。腰にあつた短剣に手を伸ばそうとするが、それはズボンを掴むばかりだった。

「君のオモチャみたいなナイフは僕が没収した」
ボロボロの外套を身にまとつた男が、傍に座つていた。まつたく見知らぬ男だ。その手には後生大事にしていた筈の短剣が握られていて、切つ先はこちらに向けられている。

似合わない髭を生やしているが、顔立ちは若い。低い鼻に、細すぎる目つきが特徴的な……行き詰つた野盗崩れ、と言つた様相の男だった。

「白湯があるから、飲むんだ。一呼吸置いたら、僕の話を聞け。僕が言つたことが判つたか？ 白湯を飲んで、それから落ち着いて僕の話を聞く。それ以外の行動を取るうとしたら、喉を搔つ切る」

「アンタは？」

なにを言つてゐるんだ？ どういう状況なんだ？ そう尋ねようと思ったが、口を開いた瞬間に、男の眼はますます鋭くなり、ナイフを握る手も強張つた。今にも飛び掛かつてきそうな気配もある。おとなしく、地面に置かれていたコップに手を伸ばす。一体いつ入れたものなのか、湯気が立つてゐる。それを一息で飲み干す。それが乾いた身体に驚くほど染み渡り、意識せずとも溜息が出た。

「僕の話は判つてゐるようだな」

男はやや警戒を解し、と言つてもナイフを手放したわけではなかつたが、ひとまずは切つ先だけは地面に向けた。

「アンタは？」

ナイツは再び当然のことを見ねた。続けて、野盗？ とまで口から出かかった。

「僕はブッチャヤー……ん、それ以外は自分のことで言つべきことはありません」

ブッチャヤーを名乗つた男は伏せがちにそう言つた。

「君の脳みそがどの程度無事か判らないから、どこから話せばいい

ものか。とにかく、君は農場で倒れていて、それを僕が救い出した。どうしてぶつ倒れていたか、覚えているか？ 僕はなぜ君が倒れていたか説明出来るが、君の頭がしゃんとするのを手伝う為に、是非君の口から聞きたい……ひどい顔色だぜ、君は自分が何者で、なぜここにいるか、説明出来るか？」

つづろう間に忍び寄る霧のように、次々と疑問が渦巻いてきた。
そうだ、なぜ。

なぜ、俺はHomeに戻ってきた？

なんのために？

頭の中に侵入してきた霧が、叙々に熱を帯び始め、それはやがて脳髄を焼く痛みに変わった。獣じみた絶叫が聞こえたが、それが自分の口から出たものだと直ぐには気付けなかつた。

少年時代を彷彿させる藁のベッドと馬小屋と青空に、すっかり気を抜かしていた。そう見えていたものは、暗中で自分が見たいと思っていたものだつた。

「ここはヘイムズ？ おれは辿り着いたのか？」

「厳密には、ヘイムズ領の辺境、入口のそのまた入口だが、遙々よくなれた。ここは確かにヘイムズだよ」

「魔王来訪の地？」

「今日は天氣も良いから、お望みなら、ここからでも見えるぜ。窓から外を覗いてみろよ」

言われるがままに、ふらふらと窓から顔を出す。

遙か遠く、天を穿つかのように屹立する巨大な人の影が見えた。空の青に溶け込む、極深い藍色の影だ。

二年前、お伽噺の世界から突如として染み出し、ヘイムズが王城に飛来した日もくらむ巨大な影。

それの足元からは静かに死や闇が溢れ、瞬く間にヘイムズは静寂の都市となつた。

ほぼ当然の成り行きで、それは魔王と呼ばれるよになつた。数々の神話やお伽噺、聖書の中で語られた、世界を終末へと導く、邪

悪なる王にして神の敵。

それが、今や目視出来る距離にいる。その事実に、寒々とした思いが広がった。

「あれが……」

「あまり見すぎると気付かれるだ。ほどほどにして、飽きたらまた僕の話を聞くんだな」

感嘆に満る間もなく、ブッチャードの冷めた声に向き直る。

「どうせあれはもう滅多なことじや動かん。見ても面白こものじやないだろ？ もづ、すっかり風景の一部だ」

ブッチャードの言うとおり、魔王と呼ばれたそれは、来訪後は静かなものだつたらしい。默示録のように、空から巨大な岩を落とし地上を蹂躪するようなことも、地獄の炎を召喚し、海を干上がらせるよつな真似はしなかつた。

ただ、静かにそこに立ち、呼吸をしているだけだ。

「もつとも明日動き出さないという保証はないが、あまり気にし過ぎてもしようがない。それよりも、僕の、簡単な質問に、いい加減答えてくれないか？」

ブッチャードは、わずかに苛立つているのか、言葉の尻をやや強くした。ナイフの切つ先を再びナイスに向け、意にそぐわぬ動きをしたら、直ぐにでも飛び掛かるうと呼吸を整えていたのが目に見える。「話しぶりから察するに、君はヘイムズに着いたばかりか？」

「あ、ああ……」

緊張に意識を向けたせいか、恐ろしく喉が渴いていたことに気がついた。もう一度白湯に手を伸ばしたいが、そうした瞬間、ナイフがこちらの喉に食い込んでいるような気もした。

「本当に、元こさつきだ。国境警備隊の男に……金を握らせて、通してもらって……」

言つてから、余計なことを喋つているのではないか、と不安になる。どの質問にどう答えたらい、ナイフが喉に滑り込んでくるんだ？ 「まづ、それは、まあ、まだまともな侵入方法だな」

まともな侵入とは、奇妙な言いぐさだつた。他に方法があつたのだろうか。

「ここへはなにしに?」

「俺はここで生まれたんだ」

そう言つた瞬間、ブツチャヤーの眉根が歪む。失敗したか、と冷たい汗が流れたが、そのまま正直に話すほかなかつた。

「なんだつて?」

「十歳になるまでは……ここで育つた。城下町の孤児院だ。俺は……」

言い終える前に、ブツチャヤーは口元を手で覆い、こちらを直踏みするかのような視線を投げかけてきて、言つた。

「城下町といふと……あれの足元か」

ちらり、と魔王に目を向け、それから目を伏せた。

「そうだ、あの足元に、俺の家が」

「……聞いてすまなかつた」

そう言つた後、ブツチャヤーはなにやら考え込むかのように、押し黙つた。たつぱり十秒ほど経つた後、しびれをきらしたこちらが声をかける直前に、ナイフを指先だけで器用に裏返し寄越してきた。

「返してくれるのか?」

「正直なところ、君をどうしたらいいのか判らない。君をただの幸運なやつだと思うべきなのか……」

それから、また少し押し黙り、忌々しげに口を開いた。

「四人」

「え?」

「四人拾つた。先日のフラッショバックのせいでの、砦の周りには再開拓者達の死体が転がつてゐる。息があつたのは四人だけ、内二人は狂つていたし、一人はまだ目覚めない……たぶん、もう二度と別になにかを期待していわけじやなかつたが」

「フラッショバック?」

判らないことはしらみつぶしに尋ねる他なかつた。

「一日置きにその質問をされるとはな。なにかなんて知らんよ。君こそ覚えていないのか？ 倒れる直前になにを見た？」

霞がかつた頭が、少しづつ晴れてきた。自分が何者で、なんの為にこの地に訪れたのか、今では完全に理解していた。そして倒れる直前に起きたことも。

（ヘイムズの記憶。ヘイムズの民。気が付けばその中に立っていて、その中で確かに再会した！）

が、不思議とそれを口に出すつもりにはなれなかつた。

「なにも覚えていないんだ。気がつけばここに、アナタが眼の前に居た」

「それだけか？ なにか話していないことはないか？」

ブツチャ一は顔をしかめ、それから息を吐いた。彼自身、何を尋ねるべきなのかを決めあぐねているようにも見えた。口をパクパクと動かし、それから、ひとしきりうなると、今度は途端に冷めたような様子で、「まあいいか」と視線を逸らす。

「名前は？ おっと、本名じゃないぜ、それは自分の為に取つておけ。ここでなんと名乗るつもりだ？」

「俺は……ナイツ。ありがとうブツチャ一」

「ナイツか。まあ、縁があつたらよろしく。とにかくもう少し休め。僕はもう行く。下に、君の話を聞きたいだろ？ 奴らが大勢居るだろうが、一応彼らには、君が無事だったことは伝えておこう、イカれちゃいないってな」

言つて、ブツチャ一は去つて行つた。去り際に、もう一度、視線を寄越してくる。その眼には見覚えがあつた。

猜疑心。こちらが言つていふことを図るような、冷たい視線だつた。

ホームカミング（後書き）

そろそろ本編に動きを持たせることができそうですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3879z/>

我々共が夢の跡

2011年12月26日22時58分発行